

氏名	武 田 克 治
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 授 与 番 号	乙 第 1588 号
学 位 授 与 の 日 付	昭和60年 9 月30日
学 位 授 与 の 要 件	博士の学位論文提出者（学位規則第 5 条第 2 項該当）
学 位 論 文 題 目	前立腺癌における androgen 依存性の biochemical indicator としての前立腺組織内 androgen 濃度に関する研究
論 文 審 査 委 員	教授 産賀敏彦 教授 関場 香 教授 太田善介

学位論文内容の要旨

前立腺癌はホルモン依存性の腫瘍としてよく知られているが、現在のところ、前立腺癌の androgen dependency を判定する正確な指標は確立されていない。本研究では前立腺癌の androgen dependency の判定に利用することを目的に、生検で得られる微量な前立腺組織を対象とした testosterone (T), 5α -dihydrotestosterone (DHT), 5α -androstane- 3α , 17β diol (A-diol) の radioimmunoassay を確立、これらを測定し、臨床経過、病理組織学的所見との関係について検討した。前立腺肥大症組織における検討では DHT が androgen dependency を示す biochemical indicator であることが示唆され、その cut off value は $2.0\text{ng/g.tissue weight}$ と考えられた。前立腺癌組織における検討では、前立腺癌組織内 DHT 濃度が 2.0ng 以上の前立腺癌のほぼ全例に antiandrogen 療法が奏効し、予後も良好であったが、 2 ng 未満の例は antiandrogen 療法が無効で予後も不良であることが多く、前立腺組織内 DHT 濃度測定が前立腺癌の androgen dependency の判定に極めて有用であることが判明した。

論文審査の結果の要旨

本研究は前立腺癌のホルモン依存性判定の指標に関する研究であるが、患者生検によって得た前立腺組織の各種アンドロゲン濃度を測定し、ジヒドロテストステロン濃度が、治療法の決定および予後の判定に有用な指標となることを明らかにした価値ある業績であると認める。

よって本研究者は医学博士の学位を得る資格があると認める。